

時	論
新	論
理	想 論

## 東南アジア「15年サイクル説」

田村 克己

(たむら かつみ)

本館副館長

### 戦後史の流れ

民博が開館したのは一九七七年である。たまたまこの年にわたしは初めて東南アジアの地に足を踏み入れた。当時のビルマ（現国名ミャンマー）は、「鎖国」しており、外交面で徹底した非同盟の政策をおこなっていた。その背景に、東西両陣営による冷戦対立があり、それに巻き込まれないためとビルマの人びとは語っていた。あれから三〇年、東南アジアの政治地図も大きく変化した。そもそもが西側陣営の国々による反共同盟であるASEAN（東南アジア諸国連合）に、今やヴェトナムをはじめインドシナ三国やビルマも加わるようになっていく。

ところで、東南アジアの戦後史は一五年を一区切りとして考えてみるとわかりやすい。第二次世界大戦が終わってからの一五年間は、独立とあらたな国作りをめぐるの混乱の時代であり、この時期の半ばくらいとき、一九五四年に、ヴェトナムでディエンヒエンフーの戦いがあり、その結果、北ヴェトナム（ヴェトナム民主共和国）は独立を自ざした抗仏戦争の勝利を確かなものとした。この第一期（一九四五―六〇年）に続く一九七五年までの一五年間は、六一年にはじまったヴェトナム戦争が戦われた時期であった。この時期のちょうど真ん中の六七年はASEANが成立した年であり、米軍に

よる北爆が始まったように、もつとも戦争の激化したときでもある。

一九七五年に北ヴェトナムによる南ヴェトナムの「解放」があり、ヴェトナム社会主義共和国が成立する。そして共産陣営に属するインドシナ三国と自由主義陣営のそれぞれがブロック化し、東西冷戦の時代に入る。他方で、この時期（一九七五―九〇年）の半ばくらい八〇年から八一年にかけて、ベトナムの新しい経済政策であるドイモイの試行がおこなわれた。同じころ、中越戦争が起っている。

以上の第三期に続くのが一九九〇年以後のアジア経済の成長の時代であり、ドイモイ政策が本格化し、東南アジアは政治中心から経済中心へと移っていく。そしてASEANは「経済共同体」としての性格をもつようになる。しかし九七年にはアジア通貨危機が起り、インドネシアのスハルト政権など、開発独裁の国家運営が破綻を来すことになる。

### 民博のあらたな貢献

以上のように、東南アジアが戦後一五年ごとの時期で区切られるとすると、ちょうど三〇年前は冷戦期のはじまりに当たり、我が国とのヒトやモノの行き交いも限られていた。三〇年経った現在、企業の進出や観光客の増加は今さらいうまでもない。東南アジアの隅々から発せられる情報量

は飛躍的に増えている。それにしても、東南アジアは今どのような時代にあるのだろうか。上述の「一五年サイクル説」でいくと、二〇〇五年から新しい段階に入ったはずである。グローバル化の一層の進展とともに、製品の流入など地続きの中国からの影響が近年目に付くところである。

東南アジアの戦後の流れは、戦争から政治、そして経済へと移っている。とすると、これからは文化の時代となるのである。か。もしそうであるならば、民博もこうした時代へのあらたな貢献を考えねばならないだろう。

初めてのビルマ。30年前のマンダレーの市場にて

